Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-07-17

Book Review 天安門事件をめぐる「一匹と九十九匹と」[八九六四 : 「天安門事件」は再び起きるか 安田峰俊・著, 一匹と九十九匹と(福田恆存評論集, 第1巻) 福田恆存・著]

梶谷, 懐

(Citation)
外交,51:140-143

(Issue Date)
2018-09

(Resource Type)
journal article

(Version)
Version of Record

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/90005462

【選評】
神戸大学大学院教授
梶谷懐

天安門事件をめぐる「一匹と九十九匹と」

八九六四
「天安門事件」は再び起きるか
安田峰俊・著
角川書店／2018年5月／1700円+税

中国を主なフィールドに活躍するノンフィクションライターの安田峰俊は、これまでに角川書店から『和僑』『境界の人』とかなり重いテーマに取り組んだ本格的なノンフィクション作品を出している。『八九六四』は、その続編に位置づけられる一冊だ。現在の中国社会において最大のタブーである第二次天安門事件に、多様な当事者のインタビューを通じて迫った本書が、力作であるところは誰しもが認めるところだろうが、その意義についてきちんと論じることは案外難しい。

その「難しさ」を解くカギとして、本書を一読した後、筆者には思い浮かんだ文章がある。保守派の文芸批評家として知られる福田恆存が、戦後間もない頃に書いた「一匹と九十九匹と」というよく知られた評論の、以下のような一節がそれだ。

「善き政治はおのれの限界を意識して、失せたる一匹の救ひを文學に期待する。が、悪しき政治は文學を動員しておのれにつかへしめ、文學者にもまた一匹の無視を強要する。しかもこの犠牲は大多數と進歩との名分のもとにおこなはれるのである。

（中略）

善き文學と悪しき文學との別は、こ

の一匹をどこに見だすかによつてきまるのである。一流の文學はつねにそれを九十九匹のそとに見てきた。が、二流の文學はこの一匹をたづねて九十九匹のあひだをうろついてゐる。なるほど政治の頽廢期においては、その惡しき政治によって救はれるのは十匹か二十匹の少數にすぎない。それゆゑに迷へる最後の一匹もまた殘餘の八十匹か九十匹のうちにまぎれてゐる。ひとびとは惡しき政治に見すてられた九十匹に目くらみ、眞に迷へる一匹の所在を見うしなふ。これをよく識別しうるものはすぐれた精神のみである。なぜなら、かれは自分自身のうちにその一匹の所在を感じてゐるがゆゑに、これを他のもののうちに見うしなふはずがない。」

この文章は、当時大きな影響力を持っていた、プロレタリア文学の流れを汲む左翼的な文学者たちによって主張された「文学は『善き政治（この場合はソ連型の社会主義）』の実現を目指す手段としてのみ価値を持つ」、という政治主義的な姿勢を批判し、文学の固有の価値を擁護するために書かれたマニフェスト的な文章である。

ただ、上記の一節を読んでもわかるように、福田の評論は、社会主義思想をただ必然的に「悪しき政治」をもたらすものとして退ける、という単純なものではない。社会主義の下でも「善き政治」は実現するかもしれないが、それでも必ずその体制の下では救われない「失せたる一匹」が出現する。しかし、当時の多くの左翼的な文学者は、「（戦前の軍国主義という）悪しき政治に見すてられた九十匹」にしか関心がなく、その悪しき政治の対極にあるものとして社会主義を信奉しているに過ぎない。「文学者」が全てそのような「善き政治」を目指す存在になってしまったなら、彼（女）らの唱える社会主義が現実的なものとなった時、だれも「失せたる一匹」に関心を持たなくなってしまうだろう。それこそが「最悪の政治」をもたらすのだ――。以上が、筆者なりにパラフレーズした福田の議論の骨子である。

この議論が、スターリンによる恐怖政治の実態などが明るみになるはるか前に書かれたことは、まさに先見の明というよりほかはないが、それはとりあえず置いておこう。

世界に遍在する「失せたる一匹」

福田が「一匹と九十九匹と」で示した議論の構図を、自国軍による市民の大量殺戮という最悪の事態をもたらした天安門事件後の中国に当てはめてみるとどうなるだろうか。これまで世界中で、事件を告発するおびただしい言葉が紡がれてきたし、これからも紡が

れていくだろう。しかしそれらのほとんどは、中国社会における「失せたる一匹」を、中国共産党による悪しき政治によって傷ついた八十匹、九十匹の中に求めうろついてきた、のではないだろうか。

何がいいたいのか、もうお分かりだろう。『八九六四』がこれまで書かれた天安門事件についてのルポルタージュと比べても際立っているのは、この作品が事件における「失せたる一匹」を、現在の中国社会に生きる「九十九匹」の外側に見出し、その実像を描き切った、という点に尽きる。

この作品において、「九十九匹のための政治」と「一匹のための文学」との対比は鮮やかだ。この本に登場するインタビュイーのうち、「仮名」で登場する、すなわち事件後、中国社会でそれなりの地位を築いた人々は、九十九匹の民衆に対し経済的に豊かな生活を保障した中国の経済発展を何らかの形で肯定的にとらえている。その中の一人が語る以下の言葉がすべてを物語っているだろう。

「中国は変わったということなのさ。天安門事件のときにみんなが本当に欲しがったものは、当時の想像をずっと上回るレベルで実現されてしまった。他にどこの国のどの政権が、たった二十五年間でこれだけの発展を導けると思う？　だから、今の中国では決して学生運動なんか起きない。それが僕の答えだ。」

だが一方で安田は、「九十九匹を救う政治」では決して救われえない、「失せたる一匹」たる人々のことを丹念に救い上げることを忘れない。ここでいう「失せたる一匹」とは、王丹やウアルカイシ、あるいは石平といった現在なお海外から中国の政治体制を批判し続けている人々のことではない。インターネットで中国社会の「真実」に目覚め、民主化運動の熱心な支持者になったマー運転手や、やはりネットでの政府批判が当局に目をつけられ、亡命先のタイでも拘束され、強制送還の末現在も消息不明の姜野飛、といった無名の人々こそが、本書で描かれた「失せたる一匹」に他ならない。

「一匹」の語りに耳を傾ける

安田は、この本の冒頭で、毎年六月になると繰り返される「天安門事件をめぐる語り」および、そこに流れる「民主主義は正しい。民主化運動をつぶすのは悪い」という論調にはいささかうんざりする、といささか挑発的な筆致で述べている。

安田の言うように、それらの繰り返される「語り」は、おしなべて中国共産党の「悪しき政治」を告発し、それが変化することを望むものだといって

いいだろう。しかし、実はその姿勢こそが、現在の中国社会において九十九匹の外側に存在する、真の「失せたる一匹」を見落とすことにつながっているのではないか。繰り返される「語り」が人々を「うんざりさせ」、中国のそして香港の若者たちの関心を遠ざけてしまうのは、そのことについてのどうしようもない鈍感さのゆえではないのか。

もちろん、事件の真相解明が全く進んでいない現状において、「悪しき政治」への批判や告発のメッセージを回避しつつ、事件について語ろうとすることには危険性も伴う。しかし、現実に存在する「失せたる一匹」を救おうとするなら、同時に「九十九匹の国民はもはや民主化運動を望んでいない」という事実に向き合うしかないのではないか。これが、筆者が本書から受けとったメッセージだ。

そもそも現代中国では、たとえ政権による民主化運動の鎮圧を肯定する、という形であっても天安門事件について語ることは許されていない。その意味では、現在の中国社会において「失せたる一匹を救う文学」をめぐる状況は戦後日本よりもはるかに絶望的である。そのことを踏まえた上で筆者は、中国社会の民主化をめぐる「うんざりする」言論状況に、ささやかであっても一石を投じた本書の意義を高く評価したい。●

福田恆存評論集
第１巻：一匹と九十九匹と
福田恆存・著
麗澤大学出版会／ 2009 年９月
※同評論は現在、千葉俊二ほか編『日本近代文学評論選昭和篇』（岩波文庫）に収録